



連載 I  
当財団専門委員  
私の研究と観光  
第 4 回

# 「天動説」から「地動説」へ

跡見学園女子大学観光コミュニケーション学部 教授 安島 博幸

工学部の出身である私の観光研究を振り返ると、ある時期にコベルニクスの転回が起きたことを自覚している。それまでの自分は「天動説」の時代に生きていたが、ある時期を境にして、「地動説」を信じるようになり、研究の視点が大きく変わったからである。

まずは、「天動説」時代の観光研究を振り返ってみる。私が観光の世界と本格的に関わりを持つようになったのは、1972年に東京工業大学社会学工学科の4年生となり、鈴木忠義先生のゼミに所属して、観光を専門的に学ぶようになってからである。

当時、鈴木研では、地域から委託を受けて、「いわき」「屋久島」などの観光地計画を実施しており、研究室に所属早々にその計画の手伝いをすることになった。後の進路に繋がる貴重な経験だった。この仕事の中で、地図から読み取った標高データを用いて、コンピュータ上で、ある地点からある地点までの「可視・不可視」を判別するコンピュータプログラムや地域の交通利便性

を数値化する最短ルートプログラムを開発した。

また、私の卒業論文は、「吸収型マルコフ連鎖による観光流動の研究」九州における旅行者の「観光行動分析」というもので、当時の株式会社日本交通公社（現ジェイティービー）から、旅行者2万人の実際のデータを使って（パンチカード2万枚）、その旅行の軌跡をコンピュータで読み取り、多変量解析とマルコフ連鎖モデルを使って、それぞれの地点と交通路の入り込み客数と交通量を予測する画期的な(?)モデルだった。その成果は、財団法人（現公益財団法人）日本交通公社の受託調査『観光交通資源調査』の一部になっている。

学部を卒業し、観光計画の専門コンサルタントだったラック計画研究所に入社することになった。4月入社を待っていたのは、年度末締切の期限が過ぎていた「高速道路の観光交通量予測」の仕事だった。この仕事に当たっては、森地茂先生（政策研究大学院大学教授）の指導を得て、4段階推定法の分布モデルとして、「オポチュニティモデル」を実験的に採用し、可能性

を検討した。このあたりまでは、数少ない工学部出身であることを期待されて、現象に対して統計的な分析を行い、予測モデルを作るタイプの工学的観光研究に取り組んだ時代だった。

そして、研究方法の大きな転機となる「送電線景観対策」の受託研究の仕事が来た。それは数百kmあるいは、それ以上に及ぶ100万ボルト超大型送電線の建設について観光地や観光資源、景観や環境への影響を避けながら、その影響を最小にする方法を研究することだった。そこには、学生時代に開発した「可視・不可視モデル」「ルート選定モデル」の考え方が生きた。当時のIBMの大型コンピュータで、10分以上の計算時間を要した。

路線選定に当たっては、できる限り人口密集地を避け、山陰に隠し、送電鉄塔のデザインにも配慮するなど、考えられる物理的・空間的対策をすべて取り入れたつもりだった。

しかし、ここで大きな壁に突き当たった。100mを大きく超えるしかも複数の大型送電鉄塔は、平野に出ると隠しようがないのだった。もう、物理的な対策は限界だった。

ここが大きな転機だった。いろいろと考えていくと、「塔とワイヤからなる送電線と似た構造物に吊り橋があるが、吊り橋は、観光資源・景観資源となるのに対して、なぜ送電線は嫌われるのだろうか？」という素朴な疑問が湧いてきた。つまり、構造物の「好き・嫌い」は、形そのもの

だけにあるわけではないと考えるようになった。「好き・嫌い」を決めている要素は、自分にも意識できない無意識下の自分が決めているのではないか。ここに至って、工学的手法の限界を痛感させられた。

当時、送電線景観の研究について指導を受けていた東工大の中村良夫先生に相談すると、無意識の心理学のユングや文化人類学の考え方は、面白いと示唆を受けた。そこで、関連の書籍を読み進めるうちに、目から鱗が落ちるような切れ味の良い理論にいくつも出会い送電線景観を理解する手掛かりが見えてきた。悲しいかな工学部出身の私には、いわゆる人文科学や社会科学のなディシプリンがない。それは欠点であると同時に、開き直って「盲蛇に怖じず」で、適用可能な理論はすぐに取り入れることに躊躇しないので、問題解決には結びつけやすいとも言える。ここが大きな研究の転機となった。自分の目で見える現象だけから天体の運行を説明しようとする「天動説」から、自分では自覚できない原理や法則によって世の中が動いている「地動説」へと研究の取り組み方が大きく変わったのである。「天動説」対「地動説」、「ニュートン力学」対「量子力学」の関係にも似ている。日常生活の99%は、「天動説」と「ニュートン力学」でも、支障を来すことはない。しかし、天動説では、惑星の運行を説明できないし、ロケットを飛ばすこともできない。ニュートン力学では、半導体

や新素材、新薬の開発はできないのである。

観光現象を考える上で、「地動説」「量子力学」的視点を私に与えてくれた学問をキーワード的に書くところ、ユングの「無意識の心理学」、レヴィ・ストロースなど文化人類学の「構造主義」、ソシュールの「一般言語学」とそれに続く「記号論」、哲学では「現象学」「身体論」、社会学では、ブルデューの「差異化」「文化資本」などである。具体的に、私の研究の中での送電線景観研究では、景観イメージは、「身体論」と「記号論」で、送電線の形態やそれが置かれた社会的コンテクストから様々な意味が生成する過程を分析的に説明することを目指しており、解決策の提案も行っている。

別荘地の歴史を研究し、別荘地の本質に迫った『日本別荘史ノート』においては、高原リゾートは、見えやすい「避暑」のためだけではなく、「交流・社交」「健康」「ステイタス」など直接見えにくい願望・欲望を背景に構造主義的な視点を持ちながら残された歴史的事実や残存する証拠によって実証することを試みている。この2つの事例を通じて研究のテーマとしたことは、いずれも、目に見えない現象の背景を貫く隠れた背景や原理、法則であり、リゾート計画にも本来反映されなくてはならない視点なのである。

我々は、まだ観光学独自のディシプリンを持っていないと思う。他分野のディシプリンの応用を観光の分野でやっているに過ぎない。それでも良

いと思う。まずは、謙虚に他分野のディシプリンに学び「地動説」の地平に立つことがまず必要である。さらに、観光分野における実践を通して、固有のディシプリンに発展していくことになると思っている。また、観光分野における適用時に矛盾や間違いが起きた時、それを元の分野にフィードバックすることは、そのディシプリン自体の発展・深化にも貢献することだと考えている。

いずれにせよ、私は、現在の観光研究のフロムを明らかにする研究課題の解答は、自分心の観察から出発する「天動説」的研究上にはなく、直接的には見えにくい人間の行動原理などを前提にした「地動説」的思考の延長上にあると考えて研究に取り組んでいる。

(やすじま ひろゆき)



安島 博幸(やすじま ひろゆき)

跡見学園女子大学観光コミュニケーション学部教授。1950年東京都生まれ。東京工業大学工学部卒業。東京工業大学社会学科助手、金沢工業大学建築学科教授、立教大学観光学部教授などを経て、2015年より現職。工学博士。元日本観光研究会会長。東京都観光事業審議会会長。観光地、リゾートの計画に関わる基礎的な研究と観光まちづくり計画の方法論を研究対象としている。最近、特に関心を持っているテーマは「観光地・リゾートの歴史的研究」および「観光地の持続的発展に関する理論的研究」など。